

時空の漂泊

(二〇一〇年十一月六日 第三十号)

高橋 滋

広島便り(あれから五年) プラス

五年前に、老後のプレイグラウンドと称して、小さな小屋を自作した(そのときの記録を、「時空の漂泊」に載せていただいた)。

その頃を振り返って今年二〇一〇年八月に「時空の漂泊」に「広島便り(あれから五年)」(第二十九号)を書いた。今回は、それに対する補足である。

広島市内から七十キロたらず、わが津田の園地からは直距離で二十五キロ程度のところに大規模なブナ林があるということが、私の「地方・



中小都市すみやすし」論のサポート
になっているかもしれない。

津田からは二十分で八百メートル
レベル(中国地方の「中位面」と呼

ばれている) (冠高原) に達し、そこから一三〇〇メートル級の西中国山地の末端 (冠山、寂地山など) に歩いて容易に行ける。

吉和まで足 (車) を伸ばせば、
十方山 (一三二八メートル) という

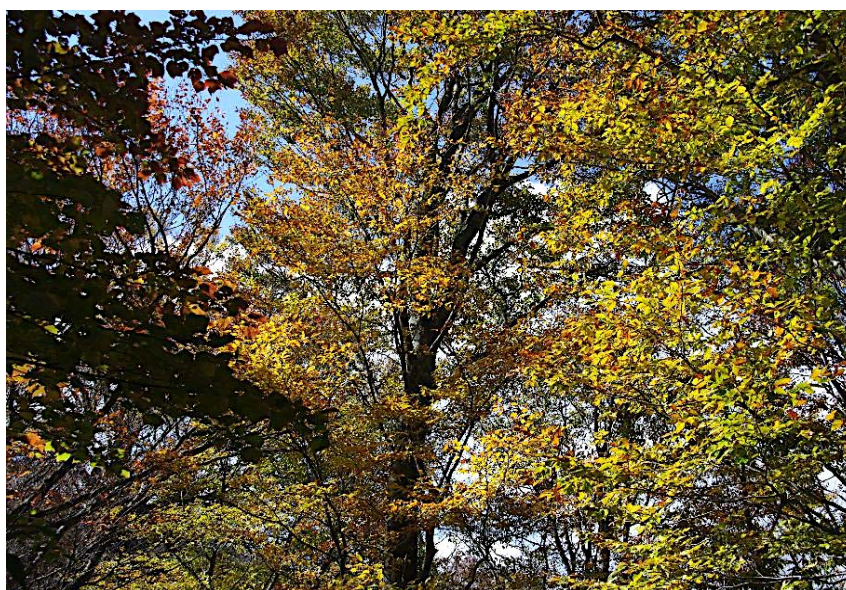
景色のよい山へ登ることができ、そこから広島県最高峰の恐羅漢山 (一三三四メートル) はまさに「指呼の間」です。

紅葉も深いですが、春先はカタクリが咲き、新緑に温泉、といいところ

恐羅漢山は広島県で一番高い山で、西中国山地の盟主でもある。島根県と接しており、その側の台所原というところにブナの原生林があり、巨木が残っている。



ここはもう里山ではなく「奥山」である。そこに十一月三日に出掛けた。山が深く、溪谷も多いので、川と紅葉のバランスがきれいである。頂上付近のブナは老化が進んでいて痛ましいが、中腹以下には壮年のも



のも多く、見事な景観だった。カエデ類も栄養を充分取って、きちんと色を出していた。朝方は零下だったが、昼間は暖かくなり、ヒオドシチョウを見ること

